

二〇一九年五月三日

種を蒔く背中合わせに老夫婦
潮干狩り母の背中を探しをり
御手洗の掬ふ柄杓に藤の屑

愛正
素秀
ぽんこ

二〇一九年五月二日

鬼瓦なづる楓の若葉影
箆を手に一芯ニ葉新茶摘む
梵鐘を撞いて近江の春惜しむ
豆腐屋の来る頃と待つ遅日かな

ぽんこ
三刀
宏虎
よう子

二〇一九年五月一日

嶮磴に苔の花咲く行者道
川堤歩けば蝶のつききたり

やよい
そうけい

二〇一九年四月三〇日

遠足の列を呑みこむ大仏殿
山車を組む若衆にとぶ老の檄
漁師町鹿尾菜干さるる防波堤
雑木山斑模様になつ葉萌ゆ
時なしの鐘の間遠や奈良暮春
新しき御世の朝や聖五月

宏虎
なつき
やよい
明日香
はく子
やよい

二〇一九年四月二九日

藤の香や万葉人は恋多き
石庭の白砂の波へ新樹光
沖の船動くともなく春霞

うつぎ
せいじ
よし女

二〇一九年四月二八日

宮参り嬰薄目あく新樹陰
万葉の歌碑に触れもす柵の藤
社家町や筍見ゆる破れ築地

なつき
たか子
うつぎ

二〇一九年四月二七日

藤の苑相聞歌碑のをちこちに
無人家の賑ひ立てる松の芯

せいじ
そうけい

毎日句会みのる選・二〇一九年五月五日